

八雲が愛した熊本の生活

～小泉八雲熊本旧居～



講師
小泉八雲熊本旧居 館長
 さかもとひろとし
坂本 弘敏 氏



小泉八雲はどんな人

ラファディオ・ハーン(=日本帰化名・**小泉八雲**；八雲は『古事記』にある、出雲の国の枕言葉“八雲立つ”に因み付けたとされる)はギリシャ生まれのイギリス人。彼の人生の旅はギリシャ(1850年誕生)に始まり、アイルランド→フランス→イギリス→アメリカ→日本・島根松江→日本・熊本市→日本・東京(1904年死去)まで続いた。1890(明治23)年、米国の出版社の通信員として来日し、その後日本に魅せられた彼は、日本女性 **小泉セツ**と結婚し帰化。日本人の間で伝承されていた死などをテーマとした民話を「怪談 (kwaidan)」という名の文学作品へ昇華。また、「日本文化のすばらしさ」を世界へ広めた著名な作家・日本研究家で、文豪夏目漱石がその日本文化研究を絶賛した外国人。さらに、1897年の著書「A LIVING GOD」のなかで「津波(tsunami)」という日本語を国際語化(「津波」を「tsunami」と表記)した人物といわれている。

熊本の生活<1891(明治24)年～1894(明治27)年>

・1891(明治24)年：
 ～1892(明治25)年



松江で**小泉セツ**と結婚した**八雲**は、家族を伴い11月、英語教師として第五高等中学校(現熊本大)に赴任のため来熊。日本文化好きだった彼は、五高の外人教師用洋館に入らず武家屋敷様式の**畳部屋**がある手取本町34番地の借家に住む(当時の熊本は西南戦争(明治10年)の焼け跡から復興し、明治22年に熊本市(人口約4万3千人)が誕生したばかり)。この頃、松江時代に開始していた『グリンプシズ』の執筆など再開。翌年1月1日には日本で初めて家庭的な正月を過ごす。着物好きだった**八雲**は、第六師団長野崎中将主催の新年宴会に**紋付袴姿**で出席。初夏、関西と島根・隠岐へ『グリンプシズ』執筆の取材に。9月中旬に帰宅し11月には西外坪井町堀端35番地(**熊本第二の旧居**；記念石碑が残るのみ)に転居。(五高近くの小峰墓地内には**八雲**が愛した**石仏**があり寺と墓地が好きだった彼がここにきては鼻の欠けた石仏に話しかけていたことから“ハーンさんの鼻かけ地藏”と呼ばれている)

・1893(明治26)年：
 ～1894(明治27)年



2月、**八雲**が敬意を抱き続け、柔道家としても魅せられていた第五高等中学校校長 **嘉納治五郎**の送別の写真撮影に参加。5月には五高ともう1年の雇用継続が決定。7月に長崎に旅行に出掛け、帰途、三角の浦島屋に立ち寄る。(この旅行の経緯は浦島伝説の由来をめぐる論考と絡め、後に名作『夏の日の夢』を生む)11月、長男一雄(愛称「カジ」)洋名レオポルド誕生(出産祝いに**秋月胤永**※**あきづきかずひさ**)が梅花鉢と酒と祝歌の掛物を携えて来訪。このエピソードは『九州の学生とともに』の結びに引用)。また、この頃から坪井の隣人達との交流が盛んになり、庭に招いて踊りを楽しんだりした。翌年1月、瑞邦館(=ずいほうかん；嘉納治五郎が五高につくった柔道場)で全校生徒を前に「極東の将来」という題で講演(その中で九州(熊本)スピリッツ「簡易、善良、素朴」と結び、県民にも受け継がれている。この講演は『龍南会雑誌』第28号や『九州日日新聞』に掲載され各方面で読み継がれた)。しかし、6月頃突然、五高退職の欲望が強くなる(10日付のチェンバレン宛書簡によれば、いきなり授業を中断し辞表を書きに帰宅後、桜井教頭のところを訪ねたとある)。まもなく『神戸クロニクル』への就職が内定。10月**八雲**は熊本を発った。 ※幕末の会津藩を支えた公用人で五高にも勤め**八雲**と親交を温めた

＜小泉八雲熊本旧居(熊本最初の家。かつて解体の危機にあったが有志の寄付で鶴屋百貨店裏の蓮政寺公園横に移築)巡り！＞

・坂本館長の案内で旧居を見学。**八雲を偲びながら往時の生活ぶりや作品誕生などのエピソードが紹介された。**
 所在地：熊本市中央区安政町2-6 ☎096-354-7842 アクセス：「通町筋」バス停下車 徒歩2分「通町筋」市電電停下車徒歩3分
 定休日：月曜(祝日の場合は翌日) 12月29日～1月3日 営業時間：9:30-16:30

＜玄關先より三和土(たつき)をあげり最初の部屋に進む＞

正面玄関

ハーン作品展示 (Kwaidan, Japanなど)

熱心に見学する受講生

＜ハーンの足跡と生涯＞(生誕・青年時代・アメリカ時代・日本時代)

＜ハーンと漱石＞

五高時代の授業は全く異質；**八雲**は一片の原稿もなく全時間些かの淡みなく書き続けるという真面目な授業。漱石の授業は粗略でひたすら教科書を読み進めていた。

八雲と漱石は、①人間不信で酷似②漱石はハーンを意識/挑戦(似通った作品、正反対の技法(文学上黒白の墨絵のような文章家のハーンに対し漱石の筆法はラファエル前派の画風さながらの濃厚な原色を点綴))

＜書斎＞

一日中陽の当たる西南の明るい部屋を書斎にし、夕日を眺めるのが好きだったため西日が当たる南西の隅に背の高い文机(強度の近視のため)を置く

毎日拍手を打って礼拝していた**神棚**(入居時に特別注文して設置)

ハーンと彼の家族(セツの実母/義父母/義祖父などと同居)の写真

ハーンの一日常(起床し煙管で一服後神棚参り…人力車で五高へ4-5時間で帰宅、昼食…入浴・晩食など)

ハーンが記した熊本の情景(「東の国から」屋根に打ち水/雨ごい太鼓など)

＜熊本におけるハーン＞

熊大構内には**小泉八雲**英文碑があり生徒を前に深い感銘を与えた講演「極東の将来」の際の結びの言葉が刻まれている(THE FUTURE GREATNESS OF JAPAN WILL…日本語訳；日本の将来が偉大になれるかどうかは九州魂或いは熊本魂即ち質素で純良シンプルなもの愛して生活上の無用な奢侈、贅沢を惜む心を保存すること如何にかかっている)

長男一雄出生時に贈られた相撲人形

＜五高とハーン＞

＜作品紹介＞

八雲は日本人の暮らしを五感で観察し、美しい文章でそれを表現したことから**ワードペインター(言葉の画家)**とも呼ばれ、豊かな感性は絵にも表れている。

八雲の自筆イラスト(おぼけ題材「妖魔時話」/絶筆となった手紙など特別公開)

作品紹介：柔術・石仏・願望成就・短い怪談(小豆磨き搦)など

取材を終えて；今回は雨の中、パレアから徒歩約2分の**小泉八雲熊本旧居**(蓮政寺公園横にある)を見学。坂本館長のお話を伺いながら**八雲**の暮らした熊本や**八雲**独特の世界を満喫しました。(くまもと県民カレッジ広報ボランティア H, K作成)